

内村鑑三―福音の使者　その現代的意義

はじめに

みずから預言者や使徒の正統な継承者と称する西洋人は、永久に続くキリスト教文明を樹立したと思いきんだ。しかしそれは、支持者の間に混乱の霊をおくった。東洋のわれわれが驚いてみているまに、巨大な建築は崩壊し、そのまま永遠の荒廢のうちに放置されている。(道家弘一郎訳、傍点筆者)

これは、内村鑑三が一九二六年(「昭和」の明けた年)に発表した「新文明」と題する英文の論稿の一節である。彼は決して預言者ではないが、「9・11」を経験した私どもにとって、何とも暗示的な文章ではないか。

内村の生涯と事業

「思想家、キリスト教伝道者」(『岩波キリスト教辞典』)内村鑑三は、一八六一(文久元)年三月、

高崎藩士の子として江戸(東京)に生まれた。七(明治十)年十七歳のとき、東京英語学校(東京大学の前身)から札幌農学校(北海道大学の前身)へ官費生として入学し、同校の初代教頭W・S・クラーク(「少年よ、大志を抱け」の言葉をもつて知られる)の残した「イエスを信ずる者の契約」に署名して入信し、宣教師M・C・ハリスから受洗した。在学中、級友新渡戸稲造(『武士道』の著者)、宮部金吾(植物学者)らと共に、北海道の原野さながらの素朴でうるわしい信仰生活を送り、一年抜群の成績で同校を卒業した。農学士。卒業と同時に北海道開拓使御用掛となり、道内の漁業調査、研究に従事した。そのかたわら友人たちと札幌基督教會(現在の札幌独立キリスト教會)を創立し、熱心に伝道した。のち御用掛を辞して上京し、一時農商務省水産課に勤務したが、八四年(浅田)タケとの離婚の傷を癒し、信仰上の疑問を解決すべく、私費でアメリカに留学した。アメリカでは、まずペンシルベニア州立エルウィン知的障害児養育院で看護人として働き、次いでアマスト大学に学び、つづさに辛苦をなめて学業を終え、理学士の称号を得た。この間、同学総理J・H・シリートの感化と助言によつて回心を経験し、キリストの十字架による贖罪の福音を信じて全く新しい人とされた。さら



年五月、内村二十八歳であった。

帰国後、新潟北越学館の仮教頭に迎えられたが、外国宣教師団と衝突して二ヵ月あまりで辞任、続いて第一高等中学校（後の第一高等学校、現在の東京大学）嘱託教員となり、英語、地理、歴史を担当した。しかし三ヵ月にして、いわゆる「第一高等中学校不敬事件」（または「内村鑑三不敬事件」、教育勅語奉読式で、勅語の天皇の署名に対し敬礼しなかったとされる）を起こして学校を追われ、国賊の汚名を着せられ、重病に倒れ、愛妻加寿子を失い、迫害と誹謗の中で国中枕するところのない不遇に泣かなければならなかった。大阪泰西学館でも教えたが、またもや学校当局と衝突して辞任した。岡田静子と結婚。こうして遂に教育事業を断念し、京都に移り住んで著述生活に入った。「餓死の決心」をしたと

に伝道者になる決意を抱いてハートフォード神学枚に入学したが、神学教育にたえられず三ヵ月で中退し、同胞に十字架の福音を伝えようと国した。ときに八八

いう貧困の中から、『キリスト信徒の慰』『求安録』や、英文の『Japan and Japanese』（のち改題して、日本語版『代表的日本人』）『How I became a Christian』（日本語版『余は如何にして基督信徒となりし乎』）など、今はすでに古典となった名著を次々と世に問い、キリスト教著述家としての地位を確立した。九七年内村は黒岩涙香（文学者）に招かれて『万朝報』英文欄主筆となり、時事問題に健筆をふるった。翌年辞して、自ら評論誌『東京独立雑誌』を興し、鋭い筆鋒をもって警世の鐘を鳴らしたが、同人たちとの間に誤解が生じたため二年にして廃刊となった。これを契機に、彼は多年の夢であった聖書雑誌『聖書之研究』を創刊、併せて日曜聖書講義（のちに、内村聖書研究会となる）も開始して、キリスト教の伝道に立ち上がった。と

きに一九〇〇（明治三）年九月、内村四十歳の秋であった。ここに彼はついに天職を発見し、天賦の資質のすべてを傾けて、天与の使命である福音の宣伝に専心するに至ったのである。この頃彼はまた黒岩らと「理想団」を組織し、足尾銅山鉍毒事件の解決に奔走した。しかし一九〇三年日露戦争に先立って、幸徳秋水（社会主義者）らと非戦論を唱え、再び客員を勤めていた万朝報社を去ってからは、一九一八（一九一八）年の再臨運動（第

一次世界大戦の影響から再臨信仰に覚醒し、近代文明を批判した）などわずかの場合を除いて、社会と直接に関わることは殆どなく、ただひたすらに聖書の研究と福音の宣伝に努め、一九三〇（昭和五）年三月、七十歳で東京に永眠するまで、三十年間ついに変わることはなかった。

内村の伝道は、自ら主宰する聖書研究会と、雑誌と著作をもってする文筆伝道であった。晩年には二年にわたって“Japan Christian Intelligencer”という英文雑誌も発行している。聖書の真理とキリストの福音を、一本のペンに託して、倦まず弛まず説き続けたのであった。この間、『聖書之研究』誌は三五七号に達し、その著書は約七十種にのぼった。この独特な伝道の結果である内村の膨大な全著作は、現在各種の『内村鑑三全集』および単行本に収められて、いまなお多くの人に読み続けられている。

内村のキリスト教

内村は一般に「教會的キリスト教」に対して無教會キリスト教を唱えた（『広辞苑』）と言われている。それに相違ないが、もう少し正確に言えば、まず「無教會キリスト教」などというキリスト教はあるはずもない。彼はただ自分が信じ宣べ

伝えたキリスト教を、「よりよい名称がないので、『無教會主義のキリスト教』と呼ぶ」（傍点筆者）と言っているまでである。内村に体系的な無教會論はないし、「無教會（主義）」という用語の使用頻度も人が思うほど多くはない。では、無教會主義とは何か。彼は言う。

「無教會主義とは、教會は有ってはならぬということではない。有るも可なり、無きも可なり」ということである。

神の生命なるキリスト教が制度でありオルガニゼーション（組織体）であるべきはずがない。生命は時に形態を取って現われ、時には形態なくして生命そのものとして存在する。生命は風である。息である。この風の吹く所に神の生命がある。そして風に形態のないように、「靈によりて生まるる者」（ヨハネ3・8）すなわちキリスト信者に形態がない。信者は教会員でない。彼は神の風に吹かれて靈によりて生まれたる者である。彼が無形たるや言うまでもない。

生命は形態を取りて現わるるものであるから、神の靈が時に教會の形態を取りて現わるるは少しもふしぎではない。われらはかかる形態を貴び、時におのが身をこれにゆだねるも、決して悪いことでない。しかしながら神と形とが同視せ

らるる時に弊害は百出する。そして形が神を圧する時に、神は生きんがために形にそむき、これと離れ、これを捨てざるを得ない。無教会主義はかかる時に起る主義である。貴むべき、なくてはならぬ主義である」(「無教会主義について」)

内村はこの無教会主義が「私の信仰である。これは私の便宜に合わない、私の性質に合い、私の信仰を助くる主義である」と告白する。しかし同時に、「私は私の無教会主義が私を救うのであるとは思わない。私は教会問題はキリスト教の根本問題であるとは信じない。私は人に私の無教会信者であることをゆるしてもらいたいように、私は人がその欲する教会に入ることとをゆるす」と明言している。

無教会主義は、それでは教会の洗礼・聖餐の両式についてどう考えるか。これについても内村は、「これにあずかるはよし、あずからざるもよし。要は十字架につけられし神の子の贖罪を信ずるにあり。その他のことは細事のみ」と言う。さらに「聖職制度については、「聖俗差別の撤廃」を主張して、聖が俗化することではない。俗が聖化する事である。聖ならざるものなきに至る事である。人生そのものが伝道事業となる事である。聖職と称して、神に仕うるための特別の階級が撤廃せられて、

すべての信者が聖職となる事である。すべての職業が聖業となる事である。われらはこの理想に向かつて進むのである」と言っている。

これを要するに、無教会主義のキリスト教とは、「人の救われるはその行為によらず、信仰によるとの信仰の帰結として唱えた」もので、「純粹に靈的であつて、靈によつて判断される信仰」であり、「形なき形のキリスト教」である。そうであれば、当然のことながら、内村はこの信仰が形を成して、「無教会」という一(宗)派をなすことなど考えもしなかつたであろう。

ところで、これと対をなすと言つてよい、内村のもう一つの主張に「日本的キリスト教」がある。キリスト教は世界的宗教であるのに、なにゆえの日本的キリスト教かという批判に答えて、彼は言う。

「ひとりの日本人が真に独立にキリストを信じるとき、彼は日本のクリスチャンであり、彼のキリスト教は日本的キリスト教である。ことはまったく單純である。日本人クリスチャンは全キリストを私するわけではないし、クリスチャンになることによつて新しいキリスト教をつくるわけでもない。彼は日本人であり、かつクリスチャンである。それゆえ、彼は日本人クリス

チャンである」（「日本的キリスト教」道家訳、
傍点原文）

同趣旨のことを、彼はこうも言っている。「わたしは二つの J を愛する。その他を愛さない。一つはイエス、一つは日本である。イエスは、日本に対するわたしの愛を強め清める。日本は、イエスに対するわたしの愛を明確にし目標を与える。イエスはわたしを世界人とし、人類の友とする。日本はわたしを愛国者とし、それを通して固くわたしを地球に結びつける。この両者がなかつたならば、わたしは単なる夢想家となり、狂信者となり、漠然たる一般人となったことであろう（「二つの J」道家訳）。

これらの発言には、現在の日本に横行する狭隘で隠微なナシヨナリズムや、今や世界を掩う宗教的熱狂^{フキヤク}と陶醉^{トウスイ}に対する強烈な批判があるばかりでなく、さらには、宗教のもつ原理的課題と云うべき「信仰と文化」の問題についての明晰な洞察さえ窺えるのである。

内村の平和思想

聖書の研究とキリスト教の伝道に集中した内村は、では超俗の生活を送ったのかというと、決して

てそうではなかった。二つの J を愛する彼の信仰がそれを許さなかった。彼は「世界人」また「愛国者」として、時代の見張りを怠らず、社会の木鐸として折々に発音し続けた。彼が近代日本の思想家の一人に数えられるゆえんである。中でも内村が終生深甚な関心を抱いたのは、戦争と平和の問題であった。彼は生涯に三つの戦争（日清・日露両戦争と第一次世界大戦）を経験している。

よく知られているように、日清戦争において彼は義戦論者であった。英文で「日清戦争の義」（一八九四年八月）を綴り、日本の正義を世界に訴えた。にもかかわらず、それは結局「欲戦として」終わった。戦勝を誇る国民に憤慨した彼は、十年後の日露戦争では、こんにち平和思想の古典的文章とされている「戦争廃止論」を引つ提げて非戦論者として立ち上がった。

「余は日露非開戦論者であるばかりでない、戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうして人を殺すことは大罪悪である。そうして大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。

世の正義と人道と国家とを愛する者よ、来たって大胆にこの主義に賛成せよ」

この主義、すなわち「絶対的非戦主義」を宣言して、彼はさらに言う。「世に『義戦』ありという説は、今や平和の主を仰ぐキリスト信者の口にのぼすべからざるものである。私自身は絶対的非戦論者である。平和は決して戦争をとおして来たらぬ。平和は戦争を廃して来たる。武器を擱くこと、これが平和の始まりである」。

なお、彼は非戦主義者になつた由来を述べて、自分の生涯に体験した「無抵抗主義の利益」と、「過去十年間の世界歴史」とを挙げてゐる。彼の平和思想が決して哲理や宗教的信念だけに基づくものでなく、人生経験や社会・歴史的考察に基づく甚だ堅実なものであつたことを示してゐる。それからあらぬか、このころ既に「人類の進歩とともに戦争の害も増し加わり、戦争は勝つても負けてもその目的を達することはできない」と論じ、「戦争の非理と損害とを唱え、万国共通してこれを廃止し、これに代うるに仲裁裁判をもつてせんとすること」をも提唱してゐる。

第一次世界大戦（一九一四〜一八年）は、内村（の非戦・平和主義）に甚大な衝撃と失望を与えた。それはキリスト教国挙げての大戦争であり、教会また一斉に賛成し、米国までが参戦するに至つた。内村は叫ばざるを得なかつた。「戦争は悪事であ

ると同時に刑罰である。負ける戦争ばかりでない。勝つ戦争もまた刑罰である。国家は戦争に従事して、負けるも勝つても、神の刑罰をこうむりつつあるのである」。

内村はここに改めて「戦争廃止に関する聖書の明示」を学び、非戦の唱道は絶えず為すべきだが、戦争はそれによつてやむのではなく、ただキリストの再臨のみが世界の平和を可能にするという希望を語るに至る。

「キリストのみが眞の平和主義者である。絶対的平和を唱えて、完全にこれを実行し得る者である。ゆえに、彼の降臨を待たずして、世に平和はおこなわれぬ。世界の平和はひっきよにするに、キリストの再臨を待つて初めて世におこなわれるものである。さらばその時までわれらは平和の唱道をとどむべきであるかというに、そうでない。われらは平和の実行を見んがためにあらず、平和を証せんがために、時を得るも、これを得ざるも、怠らずして平和を唱うべきである。希望をもつて、大胆に、非戦的平和論を唱うべきである」（「世界の平和はいかにして来たるか」）

おわりに

最後に、「はじめに」にその一部を引用した「新文明」という論文に戻ることにしよう。これは内村の平和論の延長線上に展開された彼の文明論とでも呼ぶべき小論で、永眠四年前（一九二六年四月）の文章である。彼はまず、文明がもし何らかの意味をもつものとすれば、それは西洋文明のように強力な軍備に守られなければ存在しえないようなものでなく、預言者イザヤの「平和預言」（イザヤ2・4・11・6―9）が明示したような、戦争のない世界の状態でなければならぬ、と論じる。しかるに「わたしの愛する祖国」はどうか。明治時代に未熟にも「文明とはいえない西洋文明を、そっくりそのまま受け容れてしまった！」剩れ西洋式戦闘法の採用によって三度戦争に勝利し、列強に伍する地步を占めた。しかし、それとともに全世界の愛を失った。いまや日本の国民はいたるところで恐れられ嫌われている、と厳しく批判する。

「今こそ」と、彼は熱誠をこめて勧める。「日本は眠りから醒めるべきときである。膨大な軍事予算をとともなうこの西洋文明は、完全に放棄されなければならぬ。日本は新しい文明を、真に文明であるところの文明を始めなければならぬ――それは戦争のない文明であり、『キリスト教的』欧米

の指導者となるような文明である。内村は福音の使者であつて預言者ではない。しかし、これはその死から七十年の現在の日本に向かされた何という適中した預言、適切な警告であらうか。残念ながら、今なお彼の期待に応えられずにいる。わたしは愛する祖国のために、内村はなおも切々と祈る。

「わが日本が国家的宣言を發して、五十年前武士の武装解除をしたように（一八七六（明治九）年の廢刀令）国家の武装解除を宣言し、こうして全世界に新文明を招来しようなら、それはなんとすばらしい日であろう。わたしがこれらの言葉綴りつつあるとき、ユダヤ人イザヤの他の預言がわたしの唇に浮かび、わたしに書かせるのである。

ヤコブの家（日本）よ、さあ、われわれは主の光に歩もう（「イザヤ書」2・5）」

（所載）

『近代日本のキリスト者たち』
二〇〇六年三月パピルスあい